

《7》創造都市の現場から

① BankART1929 ぎょうじじふんぱ。

はじめに

BankART 1929 は、歴史的建造物や倉庫等を文化芸術に活用し、都心部再生の起点にしていこうというプロジェクトのひとつである。旧第一銀行を改修・再現した BankART 1929 Yokohama と日本郵船の倉庫を改修した BankART Studio NYK の二棟が横浜市から無償貸与されている。両館で約3,000平米。設備、清掃等の維持費として約4,000万、2館の管理業務人件費として約2,000万、企画事業費として約2,000万が市から補助されている。これらとは別に BankART の自己収益が約8,000万あり、その合算で運営されている。常勤スタッフが10人、アルバイトが同数程度。事務、企画系の区別はない。企画展の開催、スペースの貸し出し、カフェ&パブ、スクール等のベース事業を重要視しつつ、主催及び

コーディネート事業で年間約350本(＋スクール開催が300日)に及ぶ事業運営を行っている。行政視察は他都市でのレクチャーを含めると年間200を越え、海外からも増加している。2003年末に市が運営者を公募、2004年3月にスタート、約2年の実験期間を経て、現在は本格的な事業へと移行し、2009年度末まで市と事業協定が結ばれている。移行にあたっては、創造界限推進委員会(注1)からの指針を受けて3年間の計画案を提出し、継続運営が承認された。骨子は次の3つ。

- (1) 創造界限プロジェクトのハイオニア的存在としての自覚
- (2) 他都市及び国際的なネットワークの構築
- (3) さらなる経済的な基盤の確立

5年目の活動に入った現在、この自ら掲げたミッションに対してぶれなく運営、推進しているつもりだが、どの

ようにこれまで活動をおこなってきたか、またこれからどこにいこうとしているのかを展望してみたい。

1 BankARTの特徴
〜キーワードから

初めに BankART の特徴を主なキーワードを中心に紹介してみよう。

名前の由来は、Bank + ART。元銀行だった建物を文化芸術活動にという造語だ。1929 は第一銀行、富士銀行(活動開始当初運営)がともに竣工された年であり、ニューヨーク近代美術館が設立された年でもある。また世界恐慌もこの年で、経済が厳しいときこそアートを! の願いを込めて名付けた。

公設民営。公設であるため広く市民を受け入れることを積極的に行う一方、民営であるため先駆的な活動を推進し、公設民営の新しいあり方

を探ってきている。とりわけ創造界限推進委員会の存在は大きい。有識人から構成される委員会が3ヶ月に一度ペースで開催され、委員、横浜市、BankART の三位の独立した立場での緊密な会議が継続されている。

芸術のための芸術ではなく、街づくりのためのツールであること。ある行政マンからこの言葉をはじめて聞いたときは「???」という感じだったが、ツールである限り、よく切れるハサミでなければいけない。横浜市は「自由度」というよく切れるハサミを提供してくれた。スクール、パブ等の収益事業、収益の再投下、24時間の建物使用、その他民間レベルの自由度が与えられている。

未完成。運営者決定から開館までが45日というのが主な理由だが、ハードもソフトも未完成のままスタートした。ほとんど準備なしにパブや

執筆

池田 修

BankART1929 代表

※この文章は「未来社会の設計」(2008年3月 BankART1929 発行)に掲載したものを、調査季報発行にあわせて加筆修正したものである。

(注1)

都心部歴史的建造物等活用事業の評価を行なうとともに、文化芸術による創造界限形成の推進に関する助言を行なうことを目的として設置されている。

行なってきた。

2 BankARTの特徴 事業内容から

スクールを開始したことで、様々な人々や専門家が関わることで成長していくシステムとなった。哺乳類の中で人間の赤ちゃんが最も未熟な状態で生まれるというのは周知のこと。だからこそ様々な知恵や力を授かることができた。

ピッチチャー型ではなくキャッチチャー型。自らの企画も力強く打ち出すが、市民やアーティストなどのオフア

ーを可能な限り受け入れ、コーディネートすることが最も大切。アーティストティックになりがちな企画案を委員会などでアドバイスをもらうことで懐をつくってきた。来るものは拒まず、可能な限り断らない。入口は低く、出口は少し厳しくが基本方針。

フレキシビリティ。歴史的建造物であり、暫定使用かつ様々なジャンルに対応させるため、巨大な展示壁面や受付カウンター、照明、音響等、全て移動式を採用。基本的に年中無休でオールナイトのイベントにも対応。雑誌撮影等、表現を伴わない事業は開館時間前に終了させることで販路を開いた。コンビニがそうであるように都心部の土地代の高い場所をタイムシェア・スペースシェアしながら高密度で活用することをごく自然に

今度はBankARTの特徴を事業の構成面からみてみたい。他の文化施設とさほど変わりがない構成なのになどが特徴なのか？

例えばフロント。(写真1) イベントがなくても、建物や風景を見にくる人々に対して広く開き、リピーターを育てるシステムをつくってきた。会話を介して来館者の情報を丁寧に収集し、受付というよりも、もう一歩進んだリ spons を行っている。3万件を越える住所録データベースと1・6万通のメール配信を実現。BankARTショップは芸術系のブックシヨップ。2万円/日の売上なので受付兼務。いい本を細々と、低空飛行でよしとして継続。BankARTパブは夜11時まで営業。スタジオアーティストやスクールのアフタートークに、また一般の人たちの開口部として事業全体の交差点的な役割を担っている。

BankARTスクールの特徴は、小さいけれど学校であるということだ。2ヶ月で8コマ、20人の少人数制で月々土

曜まで毎日開催し、現代の寺子屋をめざしている。これまでに121講座、379名の講師、1,750名が受講。学生同士、先生と学生との交流を大切にしており、例えば福住簾氏による美術批評のゼミでは自主的に批評紙を創刊、飯沢耕太郎氏の写真ゼミではグループ展を、梅若猶彦氏の能楽ゼミでは有料公演で350名の動員を記録した。(写真2)

アーティストインスタジオ。NYKには20〜80平米のスタジオが9つあり、2ヶ月単位でアーティストが活用し、オープンスタジオなど活発に活動している。黄金町に防犯とアートの拠点BankART桜荘を開設、日ノ出町に、アーティストが滞在して活動できるレジデンススペース、BankARTかもめ荘を新たに確保。海外や他都市からのゲストの受け入れが可能になってきた。

コンテンツ事業。展覧会カタログを会期のみではなく出版事業へと展開。地ビール業者と市職員有志からなる芸術麦酒プロジェクト等も推進している。コーディネート事業はプレス協力をしたり、BankARTが関わることでイベントそのものが向上するよ

うに心がけている。内容が面白ければ企画協力、予算提供も惜しまない。年間オフアは約1,100本でそのうち1/3程度が実現。主催事業の基本的な考えは横浜の持っている財産をリレーし、よりコンテンツポラリーに展開すること。建物、食、写真、舞踏の大野一雄他、これらのポテンシャルをどのように引き出すかがテーマ。「横浜芸術のれん街」や、「Landmark Project」のように街とコラボレーションする企画や「地震EXPO」の防災とアートのように他分野との協働事業も多い。(写真3)

3 BankARTの特徴 「エピソード」から

次はいくつかのエピソードを中心にBankARTの特徴を論じてみよう。

①リレーする構造とリ spons

運営開始からわずか4ヶ月、信じられない話ごとびこってきた。芸大の映像学科がくるのでBankART 1929馬車道(旧富士銀行)を明け渡してくれと。縦割り構造の弊害で市役所内でも険悪なムードが漂っているし、運営している側としても簡単に首を縦

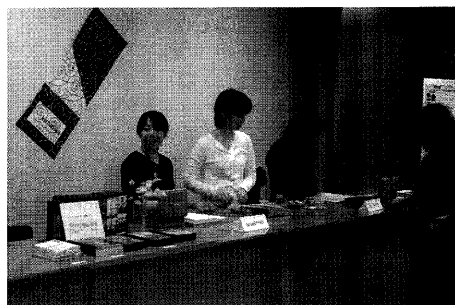


写真1 フロント



写真2 BankART スクール



写真3
「地震EXPO」
チラシ

にふれるような事柄でもない。とはいえ東京芸大がくるというのは横浜にとっては嬉しいことだし、私達の活動が誘致のきっかけの一部になったというのも聞いていたの

で、明け渡しそのものには反対する理由はなかった。そこでBankARTは3つの条件を市に提案した。(1)歩いていける場所(2)同等以上のスペース(3)タイムラグなく移転。市はこれらの条件を全てクリアしてくれた。日本郵船への強い働きかけ、補正予算のスピーディな確保、移転先の12月末までの改修工事。1月、BankART Studio、NYKのオープン。旧富士銀行改修工事を

② リレーする構造と連鎖反応

BankARTの活動がほぼ1年経過したころ、森ビルがBankARTの真向かいの北仲地区の帝蚕倉庫群を再開発することに。着工までの約2年間、仮囲いで閉ざすよりも、道路に面した事務所棟等を活用して何かできないかという相談を受けた。固定資産税と軽微な管理費は捻出して欲しいという条件。定期賃借しれないと判断した。1

Fが小部屋に分かれており、若いアーティストでも十分家賃を払える間取りだし、3Fと4Fは比較的大きな部屋割りなので力量のある建築家チームなどに向いている。約60チームに声をかけ、二度の下見会で約50チームの入居が決定。廉価な家賃設定と森ビルのスピーディな対応も相まって、3ヶ月足らずでオープンという奇跡がおこった。

「みかんぐみ」(注2)が早々に移転を決めてくれたことによる誘因力も大きかった。ただこのプロジェクトはある行政マンの個人的な担保がなければ実現していない。役所の枠を越えてBankARTをプッシュしてくれたからだ。

このプロジェクトについてふたつだけ言及すると、ひとつは、よいクリエイターが集まると自然発酵するということだ。北仲は入居者自身による意志とプロデュース力で街に開き、発信していくプロジェクト「北仲オープン」に成長していった。(写真4)もうひとつは、こうしたアーティストの動きに反応して、市が北仲の暫定使用終了時期を見据えて「ZAIM」を準備・開設してくれたことだ。公募だったが、北仲の入居者の約1/3

が移り住んだ。またクリエイターの事務所開設の際の初期費用補助制度を新たに設けるなど、市はアーティスト誘致に際しても積極的な施策を打ち出しはじめた。連鎖反応が始まった。

③ リレーする構造と都市の経験

民間へのリレーもある。本町ビル45がそれだ。ZAIMの入居条件が不安定だったため、北仲の建築系のチームが移転をためらった。誘致した責任もあつたので、入居場所探しに奔走したが、なかなか見つからない。最後に出会ったのがBankARTの目の前の本町ビル。オーナーが私達の活動に理解を示してくれた。再開発計画のあるビルは4・5階を北仲と同条件で提供してくれた。正に都市の経験という言葉があてはまる象徴的な出来事だった。

4 徹底的に開くこと

このようにこの間、横浜市、民間等、各々が反応しながら、街を少しずつ柔らかく形成してきたように思う。

「BankART 1929は駅でありたいと考えている。ヨーロッパの駅のように様々な人々が行きかい、コーヒーやビールを飲み、ベンチで眠っている人、たまにはケンカをする人、自由に音楽を奏でる人がいる、そんな包容力のある心地よく過ごせる空間を目指していきたい。また横浜は貿易の街。人が集まり、アーティストが育ち、物が動き、情報が行きかい、経済が動く、交易の場所。何か表現する人もそれをサポートする人も、それで食べていけるような経済構造へと共に変換していきたい。BankARTはそのための実験の場所でありたいと考えている。」

私たちは徹底的に開くことを試みてきたと思う。どうしたらこの施設が親しまれ、街で機能し、この仕事で生計をたてていけるのかを、既存の美術館等のもつシステムを展開する中から見いだしてきたつもりだ。「横浜トリエンナーレ2005」と連動し、BankART全館を50日間、24時間開放することをを行った「BankART Life」24時間の

ホスピタリティー」の展評で南雄介氏(国立新美術館学芸員)が次のようなメッセージを送ってくれた。(抜粋引用)

「展覧会場で泊まれるか?」というキャッチコピーが掲げられているが、夜間はトリエンナーレ公認ボランティア・作家アシスタントが利用でき、実際に宿泊できるのだという。くつろぎの空間づくりは、トリエンナーレの第二会場といった印象も呈していて、そしてよりいっそうリラックスした「ゆるい」、



写真4 「北仲オープン」チラシ

(注2) 加茂紀和子・曾我部昌史・竹内昌義・マニエル・タルディッツの4人による建築家ユニット。2005年に愛知県で開催された「愛・地球博」のトヨタグループ館など公共施設や商業施設、住宅の設計をはじめ、家具、プロダクト、展覧会会場の企画・デザイン、など幅広く活動。

といふべきか)ものになつていた。それは、展覧会としてのテーマに起因する部分ももちろんあるのだが、それとともにNPOの運営によるオルタナティブ・スペースといふこの会場の特性にも由来するものなのではないか。憩いの空間という主題への取り組みは、作者が建築家なのかデザイナーなのかアーティストなのかによつて、当然のことながら位相の違いがあるのだが、そういう異なった要素が混在しているために全体の構成がほどよくほぐれているような印象を受けた。要するに、さまざまな要素が相まって、リラクゼーションの実現に貢献していたのだと思う。

一方で、「展覧会場で泊まれるか?」という問いかけは、トリエンナーレが掲げたアートや展覧会の枠組みの問い直しとも重なる主題である。ここに見られるラディカリズムは、またBankARTが活動を開始したときから目指されてきた種類のもの。この組織の硬派な側面や理論的な可能性を代表しているのではないかと思う。「BankART的生活」/BankARTでの生活」といふもう一つのキャッチコピーに、それはよく現われている。このスペースの活

動の集大成的な表現ともなっているように、私には思われた。(中略)トリエンナーレのような巨大イベントと連動し、それをBankART自体のテーマに即して読み替えることで、BankARTの活動そのものが持っている重要性や国際性が、大きな意味を持って浮上しているのではないだろうか。』

ラディカリズムという言葉がふさわしいかどうかは別にして、BankARTは公設で行なえる限界まで、徹底的に開くことを行ってきたことは確かだ。

5 BankART Life II < (ウツク・つなぐ) >

こうしたコンセプトをさらに展開して、BankARTでは2008年秋、横浜トリエンナーレと連動し、これまで行ってきた主催事業(食と現代美術・Landmark Project・大野一雄フェスティバル他)を総合的に駆使して、公的建物(市庁舎・駅等)、歴史的建造物、産業遺構、飲食店や商店、空き地、空店舗等と協働し、街に全面的に展開していくプログラム「BankART Life II」を推進する。開催エリアは、横浜トリエンナーレ

開催地区と黄金町バザール開催地区をつなぐ地域(注3)、すなわち新港・馬車道・伊勢佐木町1〜7丁目ラインと大岡川沿いの桜木町・野毛地区・日ノ出町・黄金町ラインには含まれる全域。BankART 1929 Yokohama 本体での「心ある機械たち」展、横浜市庁舎ホールを使つての大きなインスタレーション、馬車道駅構内の「開港5都市モボモガを探せ!」、未知なる空間を切り開いていくLandmark ProjectのNYKの屋上における「ルーフトップパラダイス」と称したミニシティプロジェクト。創造界限等、25施設、飲食店300店舗等と連動する「Noren Nagantプロジェクト」では、「横浜トリエンナーレにいこう! BankART Life・黄金町バザール」とロゴが入った、応援フラッグが街中に挿入されている。ここまで創造界限が形成されてきたからこそ、より意識的に「ひらくこと・つなぐこと」を実践推進していくつもりだ。(写真5)

6 終わりに「トップダウンからボトムアップへ」

いつもBankARTは恵まれていると思う。予算や施設

面、給与などは決して他の公設の施設に比して好条件とはいえないが、何よりも常に行政の人々が一生懸命だし、実験事業であることの自由度があり、スリリングで本当に楽しい。でもこれからはどうなのか?はたしてこのままトップダウンの用意された作文の上にあぐらをかいてよいのか?

ニューヨークでもベルリンでもアートがイニシアティブをとつて街を形成してきた。不合法に略奪した場所でも、民間、行政、国がリリース、その文化度を上げること

で街を展開してきた。でもこの方法は現在の日本にはあてはまらない。横浜市がおこなっているように行政からスタートし、民間と組んで、民間に移管し……という方法をとらざるをえない。問題はここから先だ。誤解を恐れずにいうと、BankARTはだからこそ、今の段階で野に下ることが重要だと考えている。今後行政との協働作業は続くし、大きな支援を受けて運営されていくことは確かだが、だからこそBankARTは自ら関わりたい場所を見つけ、耕し、経済的に自立していくことが大切なのだ。ある指定管理者制度に関連するシンポジ

ウムの席で「モチベーションもなくできた美術館は、モチベーションもなく消えていく」と発言した。この言葉はむしろBankARTそのものに突きつけられている言葉だ。BankART 1929は第二段階に入ったと思う。自身がより深く都市に入り込み、思考し、自分の体を少しばかり変形し、敵意を歓待に変え、都市の経験を蓄積し、そして徹底的に開いていくこと。こうした作業を淡々と続けていきたいと考えている。

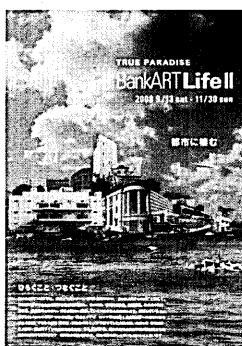


写真5
「BankART Life II」
チラシ表紙

(注3)
③「横浜トリエンナーレ」が3回も続くわけ」28頁、③「創造界限」の形成はヨコハマを変えたか」23頁参照。